

とある魔術師の悲喜劇

フュージャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼が生まれたのは極東にあるとある島国。

そこでの生活は彼を苦しめることしかなかった。

そんな彼の唯一の心の支えは姉だった。

しかし、そんな小さな平和も崩れてしまう。

これは彼の短い人生での話

※他作品の能力をお手本にしている場合があります。

目次

原作前

プロフィール | 1

1話 彼が生まれたとき | 6

2話 優しさの裏には | 9

3話 幼い記憶は炎に包まれて

13

原作前

プロフィール

最初は作者が覚えるためにもプロフィールから行きます。

ネタバレ注意です。

まずは簡単なことから

名前：チズル・アカツキ（暁千鶴）

性別：男

年齢：ルミアたちと同じ

出身：極東のとある島国

容姿：黒髪・赤みがかった茶目・切れ長な目・白い肌・髪は腰までの長さでゆるくカールがかつてる、前髪はなく、左右に分けてる・全体的に美少女のような体型、顔

身長：160cm

体重：45くらい

顔だけならば女の子よりの中性なのだが髪が長いせいで女にしか見えない

とうかそこら辺の女より美少女
ルミアやシステイとためはれるくらい
でも、声が低くなったので声を出せば男？くらいにはなる

ここからネタバレかも

チズル

魔術特性：空間の絡操と固定

備考

イタコのようなことができる

異能者で鬼になることができる

極東では異能は利用されるものである

住んでいた場所は襲われて壊滅

チズルは姉と共に実験のために拐われる

チズルの姉

名前：オウカ・アカツキ（暁桜花）

性別：女

年齢：チズル＋3

容姿：黒髪（背中真ん中までのストレート）・茶目・ぱっちりした目・スタイル抜群・

美少女

チズルは姉にそっくり

身長：165cm

体重：50ちよつと（胸あるからね）

魔術特性：表裏の偽証と真実

（嘘を本当に見せたりとか。その逆も）

備考

異能者で幻覚を創れた

人々に愛されていたお姫様

しかし、病弱

とある実験で亡くなる

切り裂き人形たち

裏社会でお騒がせ中の有名人

ちなみに名前はチーム名で姉妹？の二人組

まるで殺人を楽しむかのように殺すさまが子供のようなので人形

現場にはたくさん斬ったあとがあつたので切り裂き

ちなみに自分たちからは襲わないらしい

もし殺されたくないなら会っても逃げればいい。

もし、混乱して攻撃の一つでもしてしまえば生きては帰れないだろう

ちなみに姉妹と言われるのは片方が「姉様（あねさま）」と呼び、もう片方が「セン」と呼ばれるからである

戦ったものは死んでおり、この情報は戦わずに隠れて見ていたものからのものである
普段は黒い外套を着ており全体は分からないが、美少女らしい

たぶん、これにいろいろプラスすると思う。

これを見ても基本、それ以下しか書いてないから分からない人も多いと思う。

ちなみに主人公の魔術特性の空間の他に日本でいうイタコの力もあるので空間には
精神も入ると考えてください。

納得できないかたもいると思いますが、他の言い方が思い付かなかったのですみませ
ん。

他に良い言い方があれば変える可能性もあるので名前ではなくこんな感じの能力と
考えてくれれば大丈夫です。

1話 彼が生まれたとき

とある極東の島国の大きな屋敷で一つ、新たな命が今夜生まれようとしていた。

ここは島国の中で有力な貴族の中で最も大きな力を持つてゐるわけではないがなくてはならない力を持った一家がすんでいた。

その名を「暁」、暁家は魔術が一般的な中、未だに呪術を代々途切らさずに受け継いできた由緒ある家である。

島国は呪術が昔は一般的だったが魔術の威力や発動速度、応用のしやすさ等から呪術は次第に忘れられていった。今では完璧に扱えるのは唯一といって良いほどだ。

そんな由緒ある家柄でも暁家は皆、それをおごることなどせず礼儀正しく、親切で出来た人間だと周りから言われていた。

その家には現在、当主である優秀な父と母、それから一人娘の姫が蝶よ花よと育てられてゐる3人が仲睦まじく暮らしていた。

そして今夜、新たな命が生まれようとしていた。

母が苦しそうに呻きながら数時間、ようやく子が産まれた。父は誰も命を落とさずに

すんで良かったと安堵し、母は自分が命がけで生んだ子を抱こうとしていた。

しかし、母は我が子を抱いて顔を見て瞬間に

「ヒイツー！」

と、悲鳴をあげた。

なんとか理性が持ったのか我が子を投げ飛ばさなかったものの、我が子に対して思うはずのない感情を抱いていた。

そう、我が子の額の中央に妙な刺青のようなもの、それから左右に小さな尖ったまるで鬼の角のようなものがあったのだ。そんな人間にはとても見えない子が自分の腹から生まれたと考えた瞬間母はそんな現実が受け入れられないのか泣きわめき、疲れたように寝てしまった。

父はそんな子が生まれてしまつては我が家の看板に泥を塗つてしまうことになるのではと考え、産まれたばかりの我が子を殺そうとした。

けれども父は我が子を殺すことはなかった。愛する愛娘が産まれたばかりのタオルに包まれた我が子を大事そうに抱き締めるように守るように抱いていたからだ。

父は娘に甘かった。

娘の一言で真逆の意見に変えるくらいには、娘の一言で犯罪をするほどには狂ったように愛していた。

それから正気を取り戻した母と父は産まれたばかりの子のことについて話し合った。結局、男で異能力も強化系で娘の護衛にちょうど良いと考えた。

なぜか、それは姫は魔術に対しては天才的に向いていた、が体はとても弱く、病弱だった。

だから元から新しく生まれてくる子は姫の壁にしようとしていたのだ。だから結局は最初からそうなる予定だったのだ。

生まれてまもない子には酷すぎる運命だった。

圧倒的な差別の上に生まれた子、彼には幸せになる道など最初から用意されていなかったのだ。

2話 優しさの裏には

それから数年が経った。

彼は成長した。

言葉を理解し、言葉を話し、自分の意思を持つようになってしまった。

今日もまだ小さい子につけるには酷すぎる訓練を受けていた。

母が魔術と勉学を

父が体術と呪術を

24時間、寝るときと食べるときを除いてすべてが訓練に当てられた。

普通なら子どもはそんな環境に耐えられずに泣きわめくだろう。まだ小さいのだから出来なくて当たり前の子とも多くある。だから仕方ないことだろう。

けれども彼は泣かなかつた、文句の一つも言わなかつた。

出来なくて当たり前のことでもこなし、親の無意味な暴言にも耐えた。

何故なら、彼は賢かつたから。

彼はこの残酷な訓練に耐えられるほど賢かつたから。

この状況がどうにもならないと理解していた。

本で読んで自分より辛い環境にいる子を知っているから

彼は自分はまだましだと考えた。外に出ても独りでは生きていけないと分かっていたから。

しばらくして母が休憩だといって出ていった。

母は彼を嫌っていた。

異能はこの世界では珍しく、唯一と異つて良いほど受け入れられていた。しかし、外見に影響のあるものは皆と違うからか受け入れられず、差別した。酷いときは悪魔に憑かれていて、悪霊が、悪鬼がと。

そしてそれは名家になるほど顕著であった。家の看板に関わるからだ。それは心優しいと評判の暁家も例外ではなく、他の名家の中でも群を抜くほどに扱いが酷かった。

それでも周りから言われないのは両親がうまく隠し通していたからだろう。

コンコンツ

薄暗く、物がほとんどない生活感のない部屋にノックが響いた。

彼はそれが誰か知っていたのでなにも言わずに扉を開けた。この家で自分に用のある人の中でノックをするのは一人だけだったからだ。

「大丈夫？」

そう言つて優しく彼の怪我に手当てをしていた。

そう、親が酷く当たる原因でもある姫である。

この家で唯一話してくれる、遊んでくれる、常識を教えてくれる唯一の味方であった。
「ねえさまがいるからへいき。ありがと」

まだ舌つたらずでもしつかりお礼を言えるのは姉がいたからだろう。

「ごめんね。私になにも出来なくて」

姫はそう言いながら悲しそうな顔をして彼の頭を撫でた。

「ねえさまはわるくない。ぼくがつよくなればいい」

そういうと姫は嬉しそうに笑つてありがとうと言つた。

姫は病弱だ。聡明で心優しく美しくても外に出ることは叶わない。

だから彼は姉を外に連れ出してあげようと考えた。きつと恩返しも含まれていたのだらう。

たとえ原因が姉でも、彼は自分の異能のせいでよくならないことを知っていた。姉が唯一の心の支えであつたのはかわりないのだ。

姫は部屋を出ると先程までの優しい顔が嘘のように歪んだ笑みになった。
しかし、母が後ろから声をかけると共に後ろを向いたときには先程の歪んだ笑みはな
んだったのかと思うほど優しい慈しみの笑みに変わった。

3話 幼い記憶は炎に包まれて

彼の生活は時間が経つに連れて扱いはかいぜんされるどころかどんどん酷くなる一方だった。

島の人々は彼を無視し、石を投げ、あらぬことを口々に言った。姫を褒め称え、親は、人々は彼を認めることはおろか、名すら呼ぶことは一度としてなかった。

それは何故か。簡単である。その島に明日は訪れなかったのだ。ある日突然のことである。

常にどこかで戦争が起きている国であるがその中で一番平和だった島すらも巻き込んだ戦争が起きたのだ。どんなに優れた魔術師がいたとしても実践を知らない者が実力を発揮できるはずもなく殺された。

それは島一番の使い手と言われた彼らの両親も例外なく死んだ。

周りからはたくさんの悲鳴、爆発音、何かの壊れる音、様々な音が集まってそれは不協和音を奏でていた。

自然に溢れた美しい島が灰と屍と血と炎だけの世界になったときに彼は初めて開放されたのだ。

しかし、彼にとってそれは許されるものでは無かった。彼が唯一心を許した姉の命すら無慈悲にも奪おうとしたのだ。

姉は体が弱い。だから戦禍になど耐えられなかったのだ。

彼は姉に精一杯の回復魔術をかけた。彼が気絶するまで続けられた。

それで助かったのは幸運なのか不運なのか。

きつと不運だろう。

だって彼らを拾ったのは戦争孤児を売りさばく奴隷商人だったのだから。

彼らは彼が魔術をかけ続けたおかげでとても綺麗でその美しさから高く売れると思っただろう。

それは間違いではなく、彼らはアルザーノ帝国の一番の闇オークションで最も高く売れたのだった。

そう、天の智慧研究会に売られたのだった。

天の智慧研究会は知っていたのだろう。彼らが異能者だということを知っていた。

そこで待ち受けていたのは拷問にいた実験の数々だった。

そんなことをしてなんの意味があるのだろうか、彼は思考だけを回転させて機会をうかがうことにした。このままでは遅かれ早かれ彼と姫は死ぬことになるのを知っていたのだから。

だから彼は、彼らは従順なふりをして今を生き延びることを選んだのだった。

別にここでの行いに対しては何も感じていなかったのだ。彼らは、否、彼は知らない人がいくら死のうと何も感じないのだ。それを異常だと教えるべき人はどこにもいなかったのだ。唯一異常を感じたのは姉である姫のみで、姫すらもそんな弟に恐怖心を抱いてしまったのだった。

彼らはこれからどうなるのだろうか。

進む先は破滅か救済か。

彼を救う存在が現ればあるいは。

それは神のみぞ知る。